二〇二五年 安居開設にあたって
安居の願いと聴講の心構え

安居は、本派が行う学事の中心道場であって、広く真宗教学と仏教教理について論述及び攻究を行い、もって教学の振興と自信教人信の誠を尽くす教師を育成することをその本旨とする。

（「安居条例」第二条）

当派における安居は、享保元（一七一六）年、東本願寺「学寮」の初代講師である光遠院恵空が『大無量寿経』を講じたことがそのはじまりとされています。言うまでもなく、安居は本来、雨期の三ヵ月間に釈尊の教説を反復聞思する機会であり、その伝統を継承する夏安居が、当派においては、江戸時代に「学寮」という形をとって制度化されました。

その意味で安居は、宗門学事の最高峰である「学寮」における研究・講義を象徴する研鑽の場として、現在にいたるまで伝統されてきました。現在、会場となっている大谷大学は、「学寮」の使命を継承・展開してきた学場であり、安居の歴史を体現する場と言えます。

安居は、現代の最先端の成果をもって行われる高度な学術探究の場であると同時に、教学そのものの第一義が、宗門教化に内容を与え、方向を示すものであることを考えるとき、それは単に学問的研究にとどまらず、そこに信心の実践がともなうことが期待されます。

教学に要請されるこのような在り方を、安田理深師は「僧伽の学」と教示されています。安居に参加するということは、決して単なる集中講義の受講ではなく、宗門という僧伽の歴史に主体的に参画する態度をもって研鑽することであり、条例に示される「教学の振興と自信教人信の誠を尽くす教師の育成」とは、その具体的な表現なのです。聴講する教師は、このことを自覚し、責任を持って臨んでください。

二〇二五年 安居開設について

一　期　間
２０２５年７月17日（木）～31日（木）
※ただし23日（水）は休講日

開講式　７月17日（木）
満講式　７月31日（木）

二　場　所
①開講式・満講式――真宗本廟
②講義・攻究――宗務所・大谷大学

三　本　講
講本――『顕浄土真実証文類』
講者――嗣講　尾畑文正

四　次　講
講本――『観無量寿経』序分
講者――擬講　鶴見　晃

※詳細は本誌52頁に掲載。

真宗大谷派宗務所　教育部
℡・075―371―9193〈直通〉

2025年
安居開設にあたって

『顕浄土真実証文類』聞思

本講　尾畑文正

尾畑文正（おばた ぶんしょう）
嗣講。博士（文学）。一九四七（昭和二十二）年、三重県に生まれる。一九七一（昭和四十六）年同朋大学仏教学科卒業。一九七二（昭和四十七）年大谷専修学院卒業。一九七八（昭和五十三）年大谷大学大学院博士課程満期退学。現在、同朋大学名誉教授。真宗大谷派南米開教前監督。三重教区員弁組泉稱寺前住職。専門は真宗学。著書に『『浄土論註』に学ぶ』『親鸞聖人の手紙から』『仏さまの願い―四十八のメッセージ』『浄土真宗の？に答えます』（東本願寺出版）、『願生浄土の仏道―世親・曇鸞そして親鸞―』『真宗仏教と現代社会』（福村出版）、『社会に関わる仏教』『親鸞を生きるということ』『親鸞への旅』（樹心社）等。また電子書籍として『歎異抄に学ぶ』（響流書房）、『選択集講義』（仏教文庫雑華堂）等。

二〇二五年の安居本講の任を頂戴した。「『顕浄土真実証文類』聞思」と題し、親鸞聖人があきらかにした「真実証」について共に学ばせていただきたい。さて聖人は主著に『顕浄土真実教行証文類』と題号を掲げ、その根本主題を「大無量寿経　真実之教　浄土真宗」と顕した。阿弥陀仏の本願を説く『大無量寿経』を真実の教えとし、本願の国土である浄土を真実の帰依処とする浄土真宗をあきらかにされたのである。

そして撰号に「愚禿釈親鸞集」と名乗られたことに注意し、学びの対象である「証文類」においても、その撰号を根底に置き聞思させていただきたい。また聖人は「信文類」では「悲しきかな、愚禿鸞」とも、自らを悲歎述懐される。この「愚禿鸞」には聖人の感動が溢れている。この「愚」と「禿」と「鸞」の三字に聖人の求道の歴史が凝集している。

この名乗りは煩悩成就の凡愚なる自覚と共に、「「禿」の字を以て姓とす」と、自らの社会的な位置づけを「禿」とされた。いわば「いし・かわら・つぶてのごとくなるわれらなり」の名乗りである。その「愚」にして「禿」であるわが身を救いとる世界が、如来の本願力回向である。その如来回向のはたらきを曇鸞大師の教えにより頂戴されたからこそ「鸞」の一字を加えて、阿弥陀仏の本願力回向を生きる愚禿なる身をあきらかにされるのである。

このように聖人の「愚禿鸞」の名乗りを伺うとき、聖人が『教行信証』に示される仏道は、その冒頭に「謹んで浄土真宗を案ずるに、二種の回向有り。一には往相、二には還相なり」と始まる、万人共生を成就させる如来回向の「往還道」にあると言える。それは本願の国土である浄土を根拠に、「私と私の世界」を自己中心的に絶対化する人間に、如来回向の本願に目覚め、その本願に生きることが救いの道であるとあきらかにする。その回向の仏道こそが、鎮護国家の体制仏教の下で救いの道を閉ざされた民衆、そして聖人自身を救いとる仏道であった。

この仏道は、人間の所属性（出自、身分、国籍、民族、性差、貧富、能力等）を問わない、ただ苦悩する衆生にはたらく阿弥陀仏の本願力回向による仏道である。聖人はその仏道を浄土真宗と名付けられた。端的に言えば、阿弥陀仏の本願を根拠とする「ただ念仏して」弥陀にたすけられる仏道である。

このような仏道により煩悩成就を生きる凡夫が阿弥陀仏の本願に掴み取られている身であることを自覚し、新しく人間として誕生していく。そういう大きな世界を民衆と共に生きられた方を、人類の根本課題（宗）を私たちに先立って歩まれた方（祖）であるとの意味で「宗祖親鸞聖人」とお呼びするのである。しかしその聖人があきらかにされた万人共生の道である浄土真宗なる仏道を今日の混迷する時代と社会の中で、私たち

はどのようにいただいているのであろうか。

混迷する時代と社会とは、戦争と差別の時代である。人間が人間として尊重されない世界である。文字通りの五濁悪世である。その世界に迎合する私のありかたこそが混迷の根本である。

その自己批判を通して、改めて浄土真宗がどういう形で私に与えられているのか。この度の安居では「『顕浄土真実証文類』聞思」と題し、聖人が「浄土の真宗は証道今盛りなり」と述べられた、阿弥陀仏の本願への揺るぎない確信の一端に触れさせていただきたいと願うことである。

講本　『顕浄土真実証文類』
テキスト　『真宗聖典 第二版』（東本願寺出版）

『観無量寿経』序分聞記

次講　鶴見　晃

鶴見　晃（つるみ　あきら）
擬講。一九七一（昭和四十六）年、静岡県に生まれる。一九九五（平成七）年大谷大学文学部真宗学科卒業。二〇〇〇（平成十二）年大谷大学大学院文学研究科博士後期課程真宗学専攻満期退学。同年真宗大谷派教学研究所助手。同研究員、同所員を経て、二〇二〇（令和二）年同朋大学文学部准教授。二〇二一（令和三）年同教授。岡崎教区第三十二組善正寺衆徒。専門は真宗学。主な著書・論文に、『『観無量寿経』「是旃陀羅」問題とは何か』（三重教区）、「親鸞における「われら」の意味―真宗と差別問題―」（『同朋仏教』第六十号）、「世をいとうしるし―親鸞の至誠心理解を通して―」（『閲蔵』第十九号）、「親鸞の廻心観―韋提希と阿闍世―」（『真宗研究』第六十七輯）等。

この度、二〇二五年安居次講を拝命し、『観無量寿経』（以下『観経』）序分に学ぶ機会を与えられた。『観経』は、近年では藤田宏達講師（一九八四年本講）、小野蓮明講師（一九九一年次講）、福島光哉講師（二〇〇四年本講）が講じておられるが、今回浅学を省みず『観経』をとりあげ、就中序分のみを講本としたことについてここで述べたいと思う。

『観経』序分は、『現代の聖典』として長らく真宗同朋会運動のテキストに用いられてきた馴染み深い聖教である。同時に、禁母縁の「是旃陀羅」という経語の差別性が長らく指摘されてもきている。差別は人間のあり方に根ざす根本的な問題であると考えられるが、序分に差別が説かれることは、この人間のあり方の転換と関わっていると考えている。そしてそこに、『観経』が現代の聖典である意味があるとも考えている。安居では、差別問題を念頭に『観経』を拝読することを通して、現代の聖典としての意味を確かめていきたいと思う。

さて『観経』は、南北朝時代の南朝の宋（劉宋）の元嘉年間（四二四年～四五三年）に畺良耶舎が訳出したとされる。訳出から間もなく、曇鸞大師が『浄土論註』で言及された後、隋唐時代、浄影寺慧遠、天台大師智顗、嘉祥寺吉蔵、道綽禅師、善導大師らが注釈書を製作するなど、浄土教の展開に大きな影響を与えた経典である。浄土真宗では、善導大師が聖道諸師の『観経』観を批判して、凡夫が称名念仏によって真実報土に往生する本願の仏道を説く経典であると明らかにされたことに依り、「浄土の要門」（『観経疏』、『真宗聖典 第二版』、三八八頁）としてこの経典をいただくのが伝統である。

2025年
安居開設にあたって

しかし阿弥陀仏の観察を説く経典が、なぜ称名念仏による他力易行の道に入る要の教えであるのか。その要門としての意味を確かめたのが、『教行信証』「化身土巻」に「釈家（善導）の意に依りて『無量寿仏観経』を案ずれば、顕彰隠密の義有り」（同三八六頁）とされる顕彰隠密義である。経の「顕の義」とは定散諸善・三輩・三心であり、この「顕の義」を通して「如来の弘願を彰し、利他通入の一心を演暢す」（同）るのが経の「彰」である。そしてこの「彰」を、親鸞聖人は「達多・闍世の悪逆に縁りて、釈迦微咲の素懐を彰す。韋提別選の正意に因りて、弥陀大悲の本願を開闡す。斯れ乃ち此の『経』の隠彰の義なり」（同）とし、序分に説かれる提婆達多・阿闍世の逆害と韋提希の別選とが釈尊が阿弥陀仏の本願を明らかにした因縁である、ということに確かめている。

この提婆達多・阿闍世の逆害と韋提希の別選に対する見方は、『教行信証』総序や『浄土和讃』観経意も同様であり、親鸞聖人は、『観経』序分を本願が説かれる重要な因縁として見ている。特に観経意は王舎城の悲劇を通して阿弥陀仏の本願に私たちを引入せしめる方便が讃詠されており、自力の存在を他力に乗ずる存在へと転じる方便として序分が確かめられている。したがって前述の「是旃陀羅」の語もこの方便の中に位置づけて読む必要があるし、またこの経語も含めて序分がいかなる意味で我々に対する方便なのかを考える必要がある。

このように親鸞聖人は、序分に『観経』の顕彰隠密義の重要な要を見ておられた。そこで安居では、善導大師と親鸞聖人の視座から序分を拝読し、『観経』がいかなる意味で「浄土の要門」であるのか、そして私たちにとって差別問題とは何かという問題を確かめることとしたいと思う。

講本　『観無量寿経』序分
テキスト　『真宗聖典 第二版』（東本願寺出版）
参考書　『観経四帖疏』『真宗聖教全書』第一巻（大八木興文堂）、『定本親鸞聖人全集』第九巻（法藏館）

宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年 慶讃記念事業
真宗聖典 第二版　聖教編纂室 編
■大判 A5判・1424頁・ケース付き　定価：4,950円（税込）
■小判 B6変形判・1424頁・ケース付き　定価：4,400円（税込）
『真宗聖典』（初版）の本文を、近年の研究成果を踏まえながら確認し、より充実した『真宗聖典 第二版』として刊行。
同朋の会や講義・学習会等、日々の聞法のテキストとしてご活用ください。

教行信証（坂東本）をいつも身近に！
顯淨土眞實教行證文類 翻刻篇 縮刷版
大谷大学 編
親鸞聖人の主著であり、国宝である『教行信証』坂東本を活字化。
親鸞聖人の思索の跡が再現され、『教行信証』制作の真意にふれることができる。脚註や補註なども収載。
◆B6判・ケース入／788頁　定価：4,400円（税込）
本書は、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌を記念して出版した『顯淨土真実教行証文類 翻刻篇』を、宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃事業を機縁に、縮刷版として刊行したものです。

東本願寺出版 HIGASHI-HONGANJI PUBLISHING　〒600-8505 京都市下京区烏丸通七条上る TEL.075-371-9189 FAX.075-371-9211
詳しい書籍情報は 東本願寺出版 検索
当派の寺院・教会からのご注文は2割引となります。